心理小説としての『夜の寝覚』と『クレーヴの奥方』

―「愛の不信」の先に―

"Yoru no nezame" and "Princess of Cleves"
as Psychological Novels
― Beyond "distrust of love" ―

伊勢　光
Hikaru ISE

キーワード：愛の不信、心理小説、王朝物語、「母」、『源氏物語』
Key Words : Distrust of love, Psychological Novels, Dynasty stories, The mother, The Tale of Genji

要約

平安時代に菅原孝標女と思しき女性によって書かれた『夜の寝覚』は、人間心理を追究したその書きぶりが「心理小説」として評価されてきた。では、その書きぶりは西洋の「心理小説」と言われるものとどのように同じでどのように違うのか。そこで、本論では十七世紀にフランスの宮廷で書かれた『クレーヴの奥方』との比較を行った。

まず見えてきたのは、ヒロインが「母」の教育を経て一人の女性として自立を果たそうとする姿が描かれているという両作の共通性であった。ヒロインたちは恋を経て、「愛の不信」へとたどり着く。その中で、日本の王朝物語は「寝取られ男」の妻への愛情を描くという違いも見えてきた。

最大の違いは、その結末にある。『クレーヴの奥方』のヒロインが決然と自らの意思で男を振り切って出家を果たすのに対して、『夜の寝覚』のヒロインは、クレーヴ夫人と同じくらい「愛の不信」を感じているにもかかわらず、しがらみにとらわれて結局出家を果たせない。これは『源氏物語』の紫の上を受け継ぐ造型で、日本の王朝物語の典型とも言えるだろうが、そのように葛藤するヒロインの一生を突き詰め、その心理を描き通したところに『夜の寝覚』の心理小説としての特色があるのだった。

以上、両作の比較を通して、特に『夜の寝覚』の特色を考察した。

Abstract

"Yoru no Nezame" has been evaluated as a "psychological novel" for its writing style that pursues psychology. So how is the style of writing similar to and different from what is called a Western "psychological novel"? Therefore, in this paper, I compared it with "Princess of Cleves" written atthe French court in the 17th century. The first thing that came to my attention was the similarity between

the two works, in which theheroine is depicted trying to become independent as a woman after being educated by her “mother.”After being loved by men, the heroines have arrived at a “distrust of love”. This differs is apparent.from Japanese dynasty stories depict the love of a “cuckold man” for his wife.
The biggest difference is in the ending. In contrast to the heroine of “Princess of Cleves” who decidedlyshook off the man by her own will and became a sister, the heroine of “Yoru no Nezame” is caught upin entanglements and is unable to become a monk in the end. Even though she feels as much “distrustof love” as Mrs. Cleve. The purpose of “Yoru no Nezame” as a psychological novel is that it exploresthe life of such a conflicted heroine and depicts the psychology of it.
Through the comparison of the two works, this paper has considered the characteristics of “Yoru noNezame” in particular.

はじめに

平安後期に菅原孝標女の手によって書かれたと思しき『夜の寝覚』は、古くより女主人公ひとりのあり様、特に彼女の心理を丹念に描いたものとして高く評価されてきたと言える。つとに鎌倉時代の物語評論『無名草子』は「はじめより、ただ、人ひとりのことにて、散る心もなく、しめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきものにてはべれ」（『新編日本古典文学全集無名草子』小学館平成一一年）と述べているし、昭和の中村真一郎も「より単純な人物関係とシチュエイションとによって、ただひとつ、愛慾に追われるある一組の男女の姿だけを、どこまでも追求する。その追求のしつこさの点では、『源氏』よりも、近代の小説家の作品に、更に近づいている」「心理小説の時代の作品にも近似している」（『王朝文学論』新潮社　昭和四六年）と書いている。

本論文で特に考えたいのは、時に『源氏物語』以上とされるその『夜の寝覚』の特色、つまり「人間の内面」「心理」を追究したところが、いわゆる西洋の「心理小説」とどれだけ近似しているのか、ということである。本論では、その「心理小説」の代表として、十七世紀フランスの小説『クレーヴの奥方』を取り上げ、『夜の寝覚』と比較検討していくことにしたい。

なぜ『クレーヴの奥方』かと言えば、本作は中村真一郎が「フランス心理小説の傑作となり、新たな伝統となった」と位置づけ、また永田千奈が「フランス恋愛心理小説の歴史は、『クレーヴの奥方』に始ま」（『クレーヴの奥方「解説」』光文社　平成二八）るとする、「心理小説」の嚆矢だからである。また、それほどの作品でありながら、わが国で正面から取り上げて論じられることは非常に少なく、日本の文学作品とどう関係するのか、比較することで何が見えてくるのか、未だ明らかになってはいない。いわば未開拓の課題だと思われるためである。

これまで、散発的に『源氏物語』との比較考察はなされてきた。先にあげた中村真一郎も「実によく似た作品」と述べているし、両作の検討

に的を絞った先行研究が、福井芳男、藤原克己にある。そこで、まずはそれらの先行研究を紹介したい。そのうえで、実は『源氏物語』以上に『夜の寝覚』のほうがよほど『クレーヴの奥方』と近しいのだということを述べ、その両作の類似と差異を通して『夜の寝覚』の特質を明らかにするという手順を踏みたいと思う。

以上が本論の見通しである。

なお、本論における本文の引用は『源氏物語』は岩波文庫版『源氏物語』（岩波書店　平成二九年）、『夜の寝覚』は『新編日本古典文学全集夜の寝覚』（小学館　平成八年）、『クレーヴの奥方』は光文社古典新訳文庫版『クレーヴの奥方』（光文社　平成二八年）に、それぞれ拠った。

一

本節でまず触れておきたいのは、福井芳男の「フランス王朝時代の小説（クレーヴ公の奥方）と源氏物語」（『ユリイカ』一二―一四　昭和五五年十二月）である。福井論文には様々、示唆に富む指摘が見受けられるが、中でも重要と思われるのは以下の指摘である。

ラファイエット夫人の小説は、ひとりの女性が夫以外の男性を恋い慕い、不貞にふみ切るかどうか心の中で激しく悩むといった小説である。ひとりの女性の心の様々な動きを描写するもので、これは『源氏物語』とは全く異なった世界であろう。むしろ『かげろう日記』の方に親縁性を感じてしまう。

ギャラントリーと雅びとに似通った点がありながら『源氏物語』と『クレーヴ公の奥方』の愛の世界が全く異質な点は、『源氏物語』の女性たちは、名高き色好みの光源氏にやすやすと身を委ね、葛藤はその後から出てくる。三の宮の苦悩ははげしい心の葛藤なのであろうか、あるいは二人の男に身をゆだねた罪のおののきであったのか。

福井の言う『かげろう（蜻蛉）日記』には「ひとりの女性が夫以外の男性を恋い慕い、不貞にふみ切るかどうか心の中で激しく悩む」という内容はなく（強いて言えば下巻の、藤原遠度とのやり取りに不貞の匂いが微かに感じ取れなくもない）、さほどの親縁性はないとも思われるが、その感覚には一理ある。（『かげろう日記』と同じように）「ひとりの女性」の「心の様々な動きを描写する」という、その点にこそ『クレーヴの奥方』の最大の特色があるからだ。『源氏物語』といったんは比較しながらも、やはり差異が目立つというのが福井論文の大まかな主旨である。

なお「『源氏物語』の女性たちは、名高き色好みの光源氏にやすやすと身を委ね、葛藤はその後から出てくる」という指摘も興味深い。もちろん、朝顔姫君や空蝉のように、やすやすとは身を委ねない女君も出てくるが、おおむね福井の指摘通りと言っていいだろう。六条御息所しかり、朧月夜しかり、あるいは藤壺にしても拒むような態度を示しつつも何度か源氏に身を委ね、その後葛藤する。まず性交渉ありきの『源氏物語』と、夫であるクレーヴ公としか性交渉を持たない『クレーヴの奥方』は

相当に違う、ということなのである。

その違いは「愛を拒否して魂の憩いを得ようとした」「愛の不信」にあると福井は述べる。『源氏物語』中で強いてそうした人物を探すとすれば、宇治大君の造形が近いかと思われる（1）が、大君は結局終生夫を持たず、クレーヴ夫人の最大の魅力と言える「夫以外の男性を恋い慕」う点は異なる。「夫以外の男性を恋い慕い」ながらも、「愛の不信」を貫くヒロインとその葛藤を描く『クレーヴの奥方』と、『源氏物語』との間には大きな隔たりがあると見なすべきだろう。

ただし、その一方で「両作品ともに、愛の永続性に対する不信ということが主題化されていると言えよう」と述べ、両作は「愛の不信」という点でも共通すると指摘する藤原克己の論（2）があり、併せてこれにも触れておきたい。

藤原は宇治大君の思念とクレーヴの奥方の言葉とを比較し、上記の指摘にいたる（3）のだが、さらに「小説の組成」や「リアリズムの質のようなもの（傍点本文ママ）」も『クレーヴの奥方』と『源氏物語』は近いものがあると論じる。つまり『クレーヴの奥方』にあるアイロニカルな構図（クレーヴ夫人を占有する者は彼女から愛されず、彼女から愛される者は占有できない）、そして周到に準備された構成、展開というものが、『源氏物語』にも共通する部分があるというのだ。具体的に言えば『源氏物語』が「型」が反復、変奏される、いわば音楽的構成になっている点、かつは女性の個性と人生が「緊密な統一感をもって描き出」されている点、『クレーヴの奥方』と類似している、と藤原は述べる。そのような組成によってもたらされる（近代小説における即物的、描写的なリアリズムとは異なる）ある種の「写実性」によって、両作は象られているというのである。

藤原の指摘の中で特に興味深いのは、女性たちの自立心の強さという共通性が見られること、その一方で『源氏物語』では男から女への恋の情念は描かれるが、「女の男に対する恋の情念は、それが真正面から描かれることはほとんどない」というものである。確かに『源氏物語』において女君の恋の情念が真正面から描かれることはほとんどない（4）。この問題は、後に『夜の寝覚』との比較をしていく際に改めて考えたい。

以上、二本の先行研究を詳しく検討することで、問題の所在が明らかになってきたのではないか。

まずは「愛の不信」についての問題である。『クレーヴの奥方』は「一人の女性」の「心の様々な動きを描写」する中で特に「愛の不信」が中心テーマとなっていること、対して『源氏物語』は一部の女性にそうしたモチーフは見られるものの、はっきりと「愛の不信」を心に抱き、それに基づいて行動しようとする登場人物は少ない。そのような違いが、先行研究によって明らかにされてきた。また、「女性の自立心」という共通点も見いだされながら、一方で『クレーヴの奥方』ではその（自立した女性からの）恋情というものが描かれること――それが「愛人への想いを夫に告白する」というヒロインの特異な行動に結びついている――も『源氏物語』との違いとして見えてきた。

それら先行研究の成果を踏まえつつ、では『夜の寝覚』を『クレーヴ

の奥方』と切り結ばせると何が見えてくるのかということを次節以下で、明らかにしていこうと思う。繰り返しになるが『夜の寝覚』は『源氏物語』を受け継ぎつつも新たな世界を切り開いたと称される作品である。近代心理小説の祖である『クレーヴの奥方』と、より近接するものがあるのではないだろうか。両作の具体的な比較検討に移りたい。

二

『夜の寝覚』の前半部において、非常に重要な役割を果たしているのが対の君という女性である。対の君については、かつて筆者は集中的にその意義を考えたことがある（5）。対の君が『夜の寝覚』前半部の物語世界の大部分を構築、領導しているわけだが、その彼女の最も重要な意義の一つが、ヒロイン（中の君）の母代わりとして、何くれとなくヒロインの世話をするという点である。

物語には以下のように描写されている。

君だちの御方離れず、思ひ後見きこゆるなかにも（中略）ただこの御身に添ひて起き臥したまふを、大臣も、「いとよかんめり。この御方にあづかりて、おぼしうしろめ」とて、よろづにうちあづけたまへれば、

（（対の君は）娘たちのお側を離れず、お世話を申し上げていた中でも、（中略）ただ中の君様に寄り添って起き伏しなさっているのを、大臣も「非常に良いことのようだ。中の君のことをすべて管理して、後見してください」と、万事につけてお任せなさるので、）（二四～二五頁）

かつて拙稿でも取り上げたが、彼女は時にヒロインの内面を作りだしている。

「姫君、年まさりたまひて、いかにうつくしき御程ならむ。（中略）」など言ひて、うち泣きなどするは、さすがに御耳とどまりて、年の数添ひたまふけぢめにや、身の憂さもあはれも、ありしよりけに、思ひ知られたまふをり多かり。

（「姫様は、年も重ねなさって、どれほど可愛らしいことでしょうか（中略）」などと言って、（対の君が）少し泣いたりする様子に（中の君は）さすがに耳がひきつけられて、一つ年を取ったせいだろうか、我が身の憂さも悲哀も、以前よりはっきりと思い知られる折が多いのであった）（二二一～二二二頁）

この箇所は『新編全集』の頭注で「意思を持つ女性としての女主人公へ」「中の君変貌のきざしをみてよい」（二二一頁）とされるように、ヒロインがいわゆる「自立した女性」となっていく過程が描かれる貴重な場面である。そのような「自立した女性」が描かれる際に、世話をし、時に物事を教え諭して「教育」する女性の存在が明示されているという

ことを確認しておきたい。その「母」なる女性の「教育」がある種の指針となり、ヒロインの「自立」を助けていくという構図が見られるのだ。対の君によって「教育」された「子どもをいつくしむ気持ち」がこの後、ヒロインのアイデンティティの一要素となっていく。

同じようなことは、『クレーヴの奥方』にも当てはまる。

ヒロイン、クレーヴ夫人は母親であるシャルトル夫人に大切に「教育」されて育つ。

> 社交とは距離をおき、その間ずっと一人娘の教育に心を砕いてきたのだ。ここで言う教育とは、知性や美貌を磨くことがすべてではない。徳を授け、徳を愛することを教えてきたのだ。（中略）夫だけを愛し、夫から愛されることこそ、女性が幸せになる唯一の方法だというのだ。（一八頁）

彼女は結果的に夫以外の男を愛してしまい、この教育からは一部反してしまうものの、理性ではずっとこの教えを守ろうと意図し続ける。この教えに従順であろうとして（夫から愛されようとして）夫に愛人への想いを告白したと考えれば、この母からの教育がどれほど大きかったか分かるというものだろう（6）。

ヒロインたちはそれぞれ年上の女性（非母）の「教育」を経て、自立した女性として歩を進めていく。『夜の寝覚』について言えば、実母は既に亡くなっている。対の君は（年上の女性ではあるが）失敗もする「姉」的な立ち位置でもあるのだが、これは『落窪物語』のあこきという侍女がまさにこうした「姉」的な女性であり、その影響があるのではないかと思しい（7）。

改めて考えれば日本の王朝物語において、実母不在の姫君は非常に多い。『うつほ物語』の俊蔭女もそうであるし、『源氏物語』の紫の上もそうである。後期物語でも『狭衣物語』のヒロイン、源氏の宮は幼くして実母と死別しているし、『浜松中納言物語』に至っては尼姫君、唐后、吉野姫君と主要ヒロインの全員が実母と生別、あるいは死別している。つまり平安朝の物語では、母との紐帯を絶たれ、自立を支える「教育」が十分に果たされなかった女君の生き様を語るという文学的営為が繰り返しなされてきたと言えよう。

そうした傾向の中、実母ではないが実母の親戚（実母の姪。つまり対の君はヒロインにとっては従姉にあたる）であり、実母に準ずる働きをする対の君という存在がいる『夜の寝覚』は特異な作品と言えるかもしれない。『落窪物語』も女性の自立を描こうとした物語だったが、『夜の寝覚』は『落窪物語』からヒントを得て書かれている（8）。『夜の寝覚』には『落窪物語』を踏まえながら、自立的な女性を描きたいという思いがあったと思しい。寝覚の上は、その後、自立した母として多くの子どもたちを養育していくことになるのだが、年上の女性から「教育」を受けるという点が自立に際して重要であり、その点『クレーヴの奥方』とも共通してくるというのは非常に興味深い事象だろう。

「母」なる存在に教育を受けたヒロイン。彼女たちが夫を持ちながら

も別に、自らそれとは異なる男性を思慕していくのは、あるいは自然な流れなのかもしれない。次節ではその夫との結婚の模様、そしてその後に訪れる恋の有り様を見ていくことにしたい。

三

成長したヒロインは、男たちの評判を集めるようになる。『クレーヴの奥方』でもヒロイン、シャルトル嬢（のちのクレーヴ夫人）はその美貌で男たちを惹きつける。

宮廷に、皆の視線を惹きつける美しい女性が現れた。完璧な美というのはこういうことを言うのだろう。なにしろ、美しいものなど見慣れているはずの宮廷の人々でさえ、うっとりしてしまうような美しさなのである。（二七頁）

後に夫となるクレーヴ公も「シャルトル嬢に見とれていた」（三十頁）「シャルトル嬢の美しさと人柄で頭がいっぱい」（三一頁）と、その外見的な美貌に魅惑されていることが繰り返し描写されている。

一方、『夜の寝覚』ではどうか。周知のとおり、平安朝における良家の令嬢は普段、男の前に顔を出すといったことをしない。男たちの心を惹きつけるのはヒロインの弾く楽器の音色である。

夜更けて人静まりぬるほどに、いと近く、吹きかふ風につけて、琴の声、一つに掻き合はせられていとおもしろく聞こゆるに、おどろきたまひて（中略）箏の琴は、弾くらむ人ゆかしく心とどまりて、やをら入りたまへれど

（夜が更けて人も寝静まったころ、とても近く、吹き付けてくる風にともなって、楽器の音が一つに合わさってとても趣深く聞こえてくることに驚きなさって（中略）、箏の琴は、弾いていただろう女のことをもっと知りたいと心がひきつけられて、（男は）そっと中に侵入なさったのだが）（二六〜二八頁）

後にヒロイン、寝覚の上を恋い慕い続けることになる男主人公も、その恋は右記のように彼女の「琴の声」を聞いたことから始まる。さっと屋敷の中に侵入したとあるから、その惑乱のほどが知られよう。この後、男主人公は惑乱したまま、寝覚の上と強引に契りを交わすことになる。琴の音色の魔力は容貌以上としか言いようがない。

なお、琴の音色によって恋心を催すのは男主人公だけではない。原作本が散逸してしまっている箇所なので、改作本で引用する（9）。

寝殿、渡殿構けたる御住まひなれば、遠からぬ程にて立ち聞き給ふに、さらに類なく（中略）明日まで思ひながらふべくもあらず、今宵に限りぬべく思ひむすぼほる。

（寝殿は渡り廊下を構えた住まいなので、遠くないところで立ち聞

きをなさっていると、まったく比類ない音色で（中略）明日まで思いを我慢できそうになく、今夜で決着をつけてしまおうという考えで心がいっぱいになった）

（『中世王朝物語全集夜寝覚物語』一一〇～一一一頁）

男主人公のライバルに当たる宮の中将という男が、寝覚の上の琴の音色を聞きつけて激しく心を揺さぶられる場面である。明日まで我慢できず、今夜のうちに想いを遂げたいと思ったとあるから、これもまた相当な欲求と言えよう（この欲求は、後に寝覚の上を誘拐するという計画に繋がっていく）。

そして、中将がこの音色の素晴らしさを帝に伝えたところ、帝も寝覚の上に関心を抱くようになる。本人の容貌ではなく、楽器の音色が男たちを惹きつけるというのは和洋の比較として興味深いように思われる。

このように男たちの求愛の的になるヒロインであるが、結婚の決め手は大きく異なる。『クレーヴの奥方』の世界では女性の主体性がいかんなく発揮され、かつそうすることが社会全体から認められていると言うべきだろう。「シャルトル嬢は、自分もクレーヴ公については良い印象をもっている、結婚してもいいと思っていると答えた」（四七頁）と、本人の意思が明確に表明され、結婚に反映されている。対して平安朝の結婚に女性本人の意思は介在するはずもなく――ここも散逸してしまっている箇所だが――改作本を見ても、原作本におけるヒロインの回想を見ても、ヒロインの父親の意向で結婚が決まったように書かれている(10)。この違いも西洋と日本の差に起因するものと言えようか。

ただ結婚がひとつのきっかけとなって、直後、ヒロインたちの身に恋が降りかかってくるという点は共通するようである。クレーヴ夫人は結婚した後も夫に愛情を持てず、母から「夫に愛情をもつよう熱心に説」（五十頁）かれたほどであった。そんなヒロインが、ヌムール公と出会って恋に落ちた。「クレーヴ夫人の心にはかなり早い時期からヌムール公の姿が強く深く刻まれてしまった」（五七頁）と物語は語っている。

『夜の寝覚』も、恋は結婚直後にやってくる。結婚が決まった寝覚の上のもとに、男主人公が忍び込んでくるのであるが、その際の彼の熱心な口説きに、寝覚の上は気持ちを揺り動かされていくのである。

女君、こよなう馴れぬる心地して、先々のやうに疎ましとはおぼえず、いとなつかしうあはれなる気配のみ見えまさるに、わりなく心移り果てて、今宵ばかりと思すに、心細し。

（女君は、はなはだしく男に親しみが持てる気持ちになって、これまでのように疎ましいとは思われず、（男が）大変親しみやすく愛情に満ちた様子にばかり見えてくるので、この上もなく心が移り切って、逢瀬は今夜限りと思うにつけて心細い）

（『夜寝覚物語』一四二頁）

この辺りも原作本が現存しないが、ほぼこのような（改作本で挙げた）場面があったことは『無名草子』『風葉和歌集』などの記述からも明らか

である（11）。「こよなう馴れぬる」、つまり男にこの上もない親しみを感じていることにくわえて「わりなく」、これ以上ないほどに気持ちが移っていることが描かれる。『風葉和歌集』によれば、男のもとにヒロインの魂がさまよい出て歌を詠んだ場面があったようで、だとすれば王朝の貴族女性としては出色の描写と言えよう。夫を持ちながら別の男に心惹かれてしまうという女は『源氏物語』の空蝉に先蹤があるとはいえ、「なつかし」「あはれ」「わりなく心移り果て」といったその心内の明瞭さ、激しさはとても空蝉などの比ではない。今後、この恋が物語の主題となっていくことを予感させるに十分の心内となっている。この点は、『クレーヴの奥方』と重なってくると言えるだろう。

――結婚と、その直後の恋。女性を主人公に据えた「心理小説」として、二つの物語は、これ以後、この恋の行方を語っていくことになる。特に、ヒロインが自らの恋心に対してどう処置をしていくのか。彼女の言動に沿って、その比較、考察をしていきたい。

四

本節でまず考えたいのは、ヒロインがそれぞれ夫に別の男の存在を知られてしまう場面である。

『クレーヴの奥方』におけるそれは、この作品のひとつの山場になっていると言っていいだろう。宮廷を離れたがる理由を夫に尋ねられたクレーヴ夫人は、次のように言う。

私が宮廷から遠ざかろうとしているのには、訳があります。私のような年齢の女性が陥りがちな危険を避けたいからです。（一九一頁）

「陥りがちな危険」つまり、恋に身をやつしかねない「危惧」に触れる。はっきりと男の名前を口にしたわけでも、その思いの丈を縷々述べたわけでもなく、ずいぶん遠回しな言い方ではあるが、ともかく夫にそのような「危惧」を述べた点は、クレーヴ夫人の独自性と言えるだろう。妻の心に別の男がいることを知って、クレーヴ公の嫉妬はますます燃え上がり、ついには彼を死に追いやることになる。

一方、『夜の寝覚』の寝覚の上は、自らの口で何かを伝えるわけではない。彼女の妊娠した体が、夫に男の存在を知らしめるのである。

御腹のいと高う、こちたく苦しげになりまさり給ふを、程近くなりぬるにこそあめれと思せど、いつばかりぞと問ひきこえ給はば、いとかたはらいたかるべければ、ただ押し込めて、隠れあるべきことならねば、ただならぬ御心地の祈りどもさまざまはじめさせ給ふ。（中略）大将殿は、世の聞き耳、われも人も心にくからず軽々しきに思ひ言はれん、苦しう嘆かしかりしことも、ことのよろしかりしときのことなりけり、いと小さく弱げなる御身に、いたう暑き頃ほひに、苦しげにおはすれば、あるにもあらずおぼえ給ひて（お腹が非常に盛り上って、動くのも煩わしく苦しそうになっていく一方であ

られるのを、（夫大将は）出産も間近なのだとお思いになるけれど、予定日はいつごろだとお聞きするとしたら面目ないことに違いないので、ただ心に押し込めている。隠せることでもないので、並一通りでなく加持祈祷などを様々、始めさせなさる。（中略）大将殿は、世間が聞き耳を立てて、自分も妻も下品に軽々しく噂を立てられるだろうと苦々しく思ったが、それも寝覚の上の体調が悪くないときのことであった。非常に小さく弱々しいお身体で、とても暑い時節に苦しげでいらっしゃるので、大将殿は気も動転されるばかりで）

（『夜寝覚物語』一九〇頁）

クレーヴ夫人は恋をしていることを自分の口で夫に伝える一方、寝覚の上は恋をしていることが自分の体で夫に伝わるという構図になっている。「心理小説」、ことに女性を主軸に据えた「女の物語」の主人公として、この両人は相似性を持つ。夫（大将）が妻の口ではなく体で（＝妊娠で）他の男への恋を知るという点は、確かに『クレーヴの奥方』との大きな差異ではあろうが、クレーヴ夫人も執拗に迫られた結果、ようやく「危惧」を吐露させられたに過ぎないとも言える(12)。ここでは、「妻の恋を知った夫の反応」という差異に着目しておきたい。

寝覚の上の夫、大将は「いつの妊娠だと聞けば妻は極まりが悪いだろう」と妻を慮り、粛々と祈祷の準備を始めるが、そればかりではない。自分の子どもではない子どもを妊娠して病悩する妻に対して、「あるにもあらずおぼえ給ふ」と身も世もなく心配し、献身的に看病するのである。妻が完全に肉体的に寝取られており、大将はそれを知っているにもかかわらず、なお愛情深く世話をする姿は非常に印象的である。あるいは、ここに日本の王朝物語の特質を見ることもできようか。

例えば『源氏物語』においても、寝取られた妻に対して夫が愛情を抱きつつ、献身的に世話をするという場面がある。

宮は、いとらうたげにて、なやみわたり給ふさまのなほいと心ぐるしく、かく思ひ放ちたまふにつけては、あやにくに、うきに紛れぬ恋しさの苦しくおぼさるれば、渡り給ひて見たてまつり給ふにつけても、胸いたくいとほしくおぼさる。御祈りなどさま〴〵にせさせ給ふ。

（宮は非常に可愛らしく、病悩が続きなさっている様子がやはり何といっても心苦しく、このように愛想を尽かしなさったのに、それに反してつらいことに紛れられない宮への恋しさが苦しく思われる。部屋を訪ねて様子を見申し上げなさるにつけても、胸が痛く、いじらしくお思いになる。加持祈祷を様々させなさる。）

（『源氏物語』「若菜下」五七四頁）

光源氏は宮（女三宮）の密通、妊娠に気づいている。にもかかわらず、「あやにくに、うきに紛れぬ恋しさ」を感じ、「御祈りなどさま〴〵に」用意して世話をするのであった。ついでに言えば似たような場面は『浜松中納言物語』にもある。

影のやうにあさましく痩せ細り、その人と見えぬまで弱う、いみじながら、あえかにらうたきことまさりて、ものなどはかばかしうおぼえぬけしきに、絶え入りぬばかりになるを見るに、せむかたなくかなしければ、宮なる僧ども召して、読経はじめさせ、願ども立てさせ給ふ。

（影のように驚くほど痩せ細り、本当にその人かと思われないほど弱々しく、ひどいありさまだが、たおやかで可愛らしい魅力は増している。食事などもろくに採られない様子で息も絶え絶えなのを見ると、堪えようもなく悲しく愛しいので、宮中にお仕えしている僧侶たちを召して、読経を始めさせ、願などをお立てになる。）（『新編日本古典文学全集　浜松中納言物語』四二二頁）

主人公（中納言）は、将来的に妻にしようと考えていた女（吉野姫君）が男と契ってしまったことを知っている。それでもなお、いや、他の男と契ったからこそ、傍線部「あえかにらうたきことまさり」と彼は感じるのである。

いわば『夜の寝覚』の大将はそのような「妻の恋に寛容な年上夫たち」の一人として存在するのだが、『夜の寝覚』の独自性はその先である。このように寛容な気持ちで、ありのままの自分を愛してくれた夫を、その死後、寝覚の上は幾度となく思い返すのだ。本文を見てみたい。

「なかなか、かかるにつけても、もし長らふる命もあらば、恨めしき節多く、心劣りしたまふべき人ぞかし」と思ふに、亡き昔のみ恋しく、「我は我」とうちながめられて、

山の端の心ぞつらきめぐりあへどかくてのどかにすまじと思へば　（四八八～四八九頁）

（「（離れ離れでいるならともかく）かえってこうしてそばにいるにつけて、もし私の命が長らえるとすれば（男主人公は）恨めしいところも多く、きっと見劣りしてしまうに違いないお人であることよ」と思うので、亡き夫との昔のことだけが恋しく、「私は私なのだ」と自然とぼんやり物思いに沈んで、

山の端の心がつらいことです。月と巡り合っても、このままのどかに澄み照らせないと思うから（あなたの心がつらいことです。巡り会えたにせよ、このままのどかに住めないと思うから））

自分を変わらず愛してくれる男主人公と同衾しながら、ヒロインの心は男の愛と溶け合えない。『新編全集』の頭注が「外側からの障害はすでにない。それだけに心の相違があらわに際立つことになる」（四八九頁）と述べる通りで、もう結婚への障害は何もないのに、かつての夫、大将のことが心から離れない。亡夫と比べれば、今の恋人（男主人公）は「恨めしき節多く、心劣りしたまふべき人」に過ぎないのだ。つまり、『源氏物語』と『クレーヴの奥方』が共通して持っていた「愛の不信」というテーマを『夜の寝覚』も持っているわけだが、この物語における「不信」

は亡夫の懐古に基づいている。いわば亡夫の寛容さが新たな物語展開を引き出しているのである。

もちろんこの展開は、寝覚の上が満たされない現実の中で過去を美化しているだけとも捉え得る。しかし、たとえそうだとしても、寝覚の上がその「過去」にとらわれ、男主人公と悲劇的にすれ違っていくことが、『夜の寝覚』後半部の主旋律であることは動くまい。男主人公も、帝も、ヒロインに恋慕するのだが、その狂おしいまでの執着はヒロインに現世忌避の思いを強めさせるだけであった。

「この世は、さはれや。かばかりにて、飽かぬこと多かる契りにて、やみもしぬべし。後の世をだに、いかでと思ふを、さすがにすがすがしく思ひたつべくもあらぬ絆がちになりまさるこそ、心憂けれ」と、夜の寝覚絶ゆる世なくとぞ。

（「この世は、もうなるようになれ。この程度で、満足できないことばかりの宿命で終わりにしてしまおう。せめて来世だけでもどうにか……と思うけれど、やはり清々しく出家を思い立つことはできないしがらみばかり増えていくのは、何ともつらいことだ」と寝覚めがちの夜が絶える時はなかったのであった。）（五四六頁）

末尾の一文をあげた。寝付けぬヒロインの、ためらいがちな思念が描かれている。（クレーヴ夫人のように）出家したいが、彼女には子どもたちがいる。現世に愛想を尽かしながらも、出家もままならない。宙づりになったまま、『夜の寝覚』は終わる。

その点では、『クレーヴの奥方』の方は単純明快である。クレーヴ夫人は「別の女性を慕うあなたの姿を見る日が来るでしょう」（二九四頁）と男主人公に言い放ち、「好きだった人のいる場所には戻るまいと決めていた。そこで、宮廷に戻らないという確固たる決意は誰にも明かさぬまま、静養を口実に修道院に入ってしまったのだ」（三〇五頁）と、自らの意思のまま行動していく。「信仰に身を捧げ」（三〇七頁）ることができたクレーヴ夫人は、寝覚の上が求めた、かくありたい理想の姿ではなかっただろうか。

男と女は結局、分かり合うことはできない。結婚、あるいは一生を誓った強い愛情、どんな強い絆で結ばれたかに見えても、永遠にあてにできるものではない。そのような「諦念」が、この二つの作品に共通して流れているように思われる。ただ、二人のヒロインは共通して「愛の不信」に行きつくわけだが、決然と出家を果たし、男女の愛欲の世界ときっぱり決別したクレーヴ夫人（13）と、「愛の不信」を感じながらも出家できない寝覚の上というのは非常に対極的であると言えるのではないか。

なお例えば『源氏物語』の紫の上もこのような「諦念」を覚え、出家を望みながらも果たせずに死を迎えた女君であった。そのように『源氏物語』で試されたことを一人の女主人公の人生として構築し直し、愛欲の世界で葛藤し続ける女をヒロインとして据えたのは、やはり『夜の寝覚』独自の達成であったと考えられる。悟りながらも女として（妻として、母として）生き続けさせられる悲哀が、寝覚の上にはある。『クレー

ヴの奥方』と比較することで、改めて寝覚の上が背負っている文学的テーマが見えてきたのではないだろうか。

むすびにかえて

ここまで、『夜の寝覚』と『クレーヴの奥方』との比較を通して、日本の王朝物語の特質、特に『夜の寝覚』の特質について考えてきた。クレーヴ夫人も寝覚の上も、「男と女は分かり合えない」という諦念を受けて造型されており、「愛の不信」に行きつく点、共通するヒロインであった。彼女たちは夫を持ちながらも他の男への恋心を抱き、しかし、夫の死後もその恋に身を委ねない冷めた心を持ち合わせていた。彼女たちのその「心」の苦悩や葛藤が、それぞれの作品を文学史に刻む「古典」としたと言えるだろう。

そして、その比較から日本の王朝物語が、母不在の中で女性が自らの人生をどのように生きていくのかという問題を繰り返し語っていること、その中で特に『夜の寝覚』は『落窪物語』を参照しつつ、年上女性からの「教育」をもとに自立した（精神的な自立を果たしても必ずしも社会のなかで常に意志的に振る舞えるというわけではないが）女性像を構築しようとしていることが見えてきた。しかし、寝覚の上はクレーヴ夫人同様、「愛の不信」を抱きながら、様々なしがらみに縛られて出家することができない。母という役割を担ってしまったがゆえに「さすがにすがすがしく思ひたつべくもあらぬ絆がちになりまさる」（五四六頁）自分に、寝覚の上は気づかされる。ヒロインが思うに任せぬ宙づりになっていること、これが『夜の寝覚』の最大の文学的魅力であろう。一方のクレーヴ夫人は、永田が「解説」で述べていたように「意志的で行動力のある女性」（三二三頁）であり、「こうした近代性もまた、この作品が今も読まれる理由のひとつ」（三二四頁）なのであった。二人のヒロインの懸隔は甚だしく大きい。

つまり、この両作は「愛の不信」という点では共通しながらも、違いの先にそれぞれのヒロイン、それぞれの作品の最大の文学的特色があった、と言えよう。本稿はそのような、ある種当たり前のことを確認しただけだったが、世界文学の中での『夜の寝覚』の立ち位置が少しでも確認できたとすれば望外のことである。御批正をお願いしたい。

注

（1）なお空蝉に関しては、永田千奈も「光源氏を拒んだ女」として、その類似性を指摘する。しかし、空蝉の場合は源氏と契りを結んでしまっているうえに、かつ空蝉はいわゆる「めやすくもてつけてもありつる中の品」（「帚木」一七六頁）に過ぎず、光源氏にとっては藤壺や紫の上といった対等な恋の相手ではない。事実、夕顔という新たな女の前に、源氏の関心はすぐにそちらに向けられていく。その点、クレーヴ夫人との類似性はそう大きいものではない。ただ空蝉自身の、光源氏を憎からず思いながらもその求めを拒もうとする心理の葛藤は「帚木」巻後半を中心に確かに描写されており、クレーヴの奥方との類似性は認められるだろう。

（2）藤原克己「『源氏物語』と『クレーヴの奥方』」（『文字の都市――世界の文学・文化の現在十講』東京大学出版会　平成十九年）

（3）藤原が指摘するように、特に宇治大君に関しては男の愛というものへの不信、そして、その不信ゆえに自分が発する愛をも信じられなくなるという「愛の不信」がよく表出されている。この意味でも『源氏物語』特に宇治十帖の段階で、日本文学に心理小説の萌芽が見られると言えるのではあるまいか。なお、「愛の不信」の内実について泉敏夫は「「クレーヴの奥方」における告白の意味」（『神戸女学院大学論集』一　昭和六十年七月）で「愛の不信はヌムール公の愛に関するもの」とし、自分の「ヌムール公に対する愛は不変」だと信じていたとしている。なお考えたい。

（4）わずかに宇治中の君が、夫である匂宮に恋の情念らしきものを表出する場面が「総角」巻にあり、かつてそれを『夜の寝覚』とのかかわりで論じたことがある。「ヒロイン「中の君」という呼称――「中の君」とは何か」（『『夜の寝覚』から読む物語文学史』新典社　令和二年初出平成二四年）も併せてご参照いただきたい。

（5）『『夜の寝覚』から読む物語文学史』（新典社　令和二年）第一章「『夜の寝覚』を読む」参照のこと。

（6）ジュリー・ブロックは「フランス文学に見る恋愛観――十二世紀から十八世紀前半まで」（『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告「人文」』五二　平成十五年三月）で、「母の教えを遵守する彼女の精神」がヒロインの出家を必然のものとしているとする。

（7）拙稿「『落窪物語』あこきの役割――もう一人の「女主人公」として」（『『夜の寝覚』から読む物語文学史』新典社　令和二年）にて詳しく論じた。

（8）足立繭子「『夜の寝覚』発端部と継子物語――《母》物語としての位相」（『中古文学論攷』一二号　平成三年十二月）に詳しい。

（9）改作本『夜寝覚物語』は十四世紀頃の成立で、特に後半部に関しては独自の物語展開を持つため原作本『夜の寝覚』との懸隔は相当なものと思われる。ただ中間の原作本欠落部の内容に関しては、『無名草子』が原作本を評した個所と、改作本との間に大きなずれはなく、改作本は原作本に比較的忠実と言えそうである。どこまで同一視可能なのか、なお慎重に考えたいところではある。

（10）『蜻蛉日記』に関してはそれがさらに明確で、本人（道綱母）が「便なきこと」と、兼家との交際を躊躇ったにもかかわらず、両親が半ば強引に文通させ、結婚をさせたように書かれている。

（11）『風葉和歌集』では、「ねざめのひろさはの准后、心にもあらずおい関白にむかへられて、なげき侍けるころ、わか関白のゆめに見え侍ける歌」とあり、「物おもふにあくがれいで、うきみにはそふたましひもなく〳〵ぞふる」（『寝覚物語欠巻部資料集成』一八頁）というヒロインの歌を載せる。男主人公に物思いをして、魂が彼の方にいくほどの思いにとらわれていたことがうかがえる。

（12）なお、『クレーヴの奥方』からちょうど二百年後に書かれたトルストイの『アンナ・カレーニナ』では、自分の口ではっきりと夫に対して愛人への想いを告白する女主人公が描かれる。そのアンナに比べれば、クレーヴ夫人の表出ぶりは非常に慎ましやかである。

（13）林修はこの出家を「女による女の生の認識、そして性の認識のための決断となっている」と指摘する（「〈平穏〉の希求、〈女〉の希求『クレーヴの奥方』の生涯」（『言語文化研究』八　平成二年三月）。まさに紫の上や寝覚の上がしたかった決断を、クレーヴ夫人はしたと言えるだろう。